煎茶を介した文人たちの交遊
——頼山陽を中心として——

島村幸忠

序

江戸時代の文化・文政期に活躍した文人たち[1]は、「中国趣味あふれる道具に囲まれ、煎茶を喫しながら、書画や音曲を鑑賞し、学問・芸術談義に同好の士と交わる生活」[2]を送ることを理想としていたとされている[3]。そのような文人たちのなかでも、特に目立つ存在として頼山陽（名は襄、通称は久太郎、字は子成、号は山陽や三十六峰外史など、安永九〔一七八一〕年〜天保三〔一八三二〕年、以下、山陽とする）があげられるだろう。本論では、その山陽と他の文人たちとの交遊において、具体的に煎茶がいかに喫されていたのかを明らかにすることを試みる。その際、あまたいる文人仲間のなかでも、山陽が特に大切にしていた二人の友、田能村竹田[4]と雲華上人[5]を中心に取りあげることにしたい。

文人同士の交遊がいかになされていたのかを知るために参考とすべきは、彼ら自身が詠んだ漢詩であろう。このことについては、例えば、舩阪富美子

---

1 日本の文人については中村幸彦「文人意識の成立」（一九五九年）『中村幸彦著作集』（十一巻）（中央公論社、一九八二年）三七五〜四〇七頁を参照のこと。中村によれば、その主な特徴として「多藝性」「反俗性」「隠逸性」「孤高性」の四つが挙げられる。

2 守屋「文人のあこがれ、清風のこころ　煎茶・美とそのかたち」十二頁。

3 例えば、竹田が「竹田荘茶説」（文政十二〔一八二九〕年）を著した目的として、「此ノ書ハ唐土の茶の点方を今-日に用ひ行ふや」ふに考へて同人相-会し山に登り水に臨み詩」を論じ畫を評する時の一助とす」（竹田「竹田荘茶説」三九九頁）と述べている。また、そのような文人たちの集う場は、ときに「文人サロン」と呼ばれる。「文人サロン」については、「文人サロンの形成」『藝能史研究』（三一）（藝能史研究会、一九七〇年）三三〜四〇頁を参照のこと。

4 名は孝憲、通称は竹蔵、字は君彝、竹田は号のひとつ、安永六（一七七七）年〜天保六（一八三五）年、以下、竹田とする。なお、山陽と竹田の交遊に関しては、主に頼多万の「頼山陽と田能村竹田」を参照した。

5 真宗大谷派の僧、姓は末弘、名を大含、字を大含、雲華は号のひとつ、安永二（一七七三）年〜嘉永三（一八五〇）年、以下、雲華とする。

が「館柳湾の漢詩にみる煎茶」のなかで、いみじくも次のように述べている。すなわち、「日本においても、近世中頃から煎茶が広まるにしたがって、文人たちは煎茶を詠んだ漢詩を多く作ってきたが、煎茶書に比べると、一部の例外を除いて、その姿は断片的にしか紹介されてこなかった。しかしながら、煎茶に対する文人の想いを知る手がかりとしては、これほど有用なものはないだろう」[6]と。山陽においては、なおのことそうであるといえる。というのも、山陽の残した漢詩の多くは、徳富蘇峰が述べるように、「事実其者を直ちに詩と爲し，詩と実際生活とを別々に考へず，実際生活の中に詩があり，詩の中に実際生活があると云ふ如く，両者の間に親密の関係を見出し，此くして眼前の景・口頭の語を，悉く詩中に取り入るゝ」[7]が如きものだからである[8]。茶に関する詩もその例外ではない。

山陽の茶に関する漢詩を扱った主な先行研究としては、楢林忠男の『碧山への夢』があげられる。同書の主眼は、江戸前期から幕末までの煎茶に魅せられた文人たちがいかに煎茶と関わっていたのか、あるいは、煎茶を中心に彼らがいかに交流していたのか、を跡づけていくことに置かれているが、そのなかには竹田も含まれており、竹田を中心とした山陽や雲華などとの交遊についても言及してある。ところが、その交遊を跡づけるものとして参照されている資料は、竹田の「卜夜快語（ぼくやかいご）」（文政元〔一八一八〕年）や「頼山陽留贈せらる茶具に題す」（天保四〔一八三三〕年）のみに留まっており、その全貌を把握するには至っていない。実際のところは、山陽における煎茶を介した交遊の痕跡は、楢林が言及することのなかった他のいくつかの詩のなかにも確認することができるのであり、それらの資料は、山陽における煎茶の意義について考えるうえでも、決して看過されてはならないものであるといえる[9]。

6　船阪「館柳湾の漢詩にみる煎茶」三八頁。

7　徳富『頼山陽』二六六頁。この徳富の指摘に関しては、船津「頼山陽の詩論」一一四〜一一五頁、揖斐「解説」『山陽詩選』（岩波書店、二〇一二年）三五七〜三五八頁も併せて参照のこと。

8　この点に関しては、勿論、山陽の時代には漢詩界の主流が「古文辞格調派」から「清新性霊派」へとすでに移行していたということも関係しているだろう。以下を参照のこと。富士川英郎『江戸後期の詩人たち』（東洋文庫、八一六）（平凡社、二〇一二年、ただし初版は麦書房、一九六六年）、中村真一郎『古典を読む江戸漢詩』（同時代ライブラリー、三三二）（岩波書店、一九九八年、ただし初版は岩波書店、一九八五年）。

9　山陽における煎茶を概観したものとして、漆原拓也「文人煎茶の盛衰」（法政大

そこで本稿では、山陽、竹田、そして雲華の作した詩文のなかでも、特に煎茶に関するものを取りあげ、それらに依拠しつつ、煎茶を介した彼らの交遊がいかになされていたのか詳らかにしていく。以下では、まず、山陽と竹田について考察する（第一節）。そして、次に、山陽と雲華の交遊を取りあげる（第二節）。

一　竹田との交遊

山陽は「幾多の朋友の中心点」[10]であった。この徳富蘇峰の言を裏づけるように、中村真一郎の『頼山陽とその時代』では、江戸から京阪、そして九州にいたる多くの文人仲間が紹介されている[11]。そのなかでも、山陽に「最も心の休まる時間」[12]を与えてくれたのが竹田であった、と中村はいう。文人画家として名を馳せる竹田だが、彼の画論『山中人饒舌』にも引いている「萬巻の書を読まず、萬里の路を行かずんば、畫祖と作らんと欲するも、其れ得べけんや」[13]という明末の文人画家・董其昌の言葉を実現するかのように、生涯を通じて諸国への遊歴を繰り返した。山陽と竹田の両者が初めて相見えたのも、文化八（一八一一）年に竹田が京遊したときのことで、大阪の生玉持明院においてであった。その際に山陽が竹田に送った書簡には、「此間は、浮生半日之閑どころにては無之、得半生好友候て、一見如故、近來之佳興ニ而御座候イキ」[14]とあり、その出会いの喜びがうかがえる。

反対に、竹田にとっても山陽がかけがえのない友であったということは、例えば、後にも取りあげる「卜夜快語」のなかで「山陽詩を作るに、虚心にして能く譏駁を容る。蓋し才學浩博にして、碍ぐる所無きが故なり。余嘗て其の秋柳絶句を賞す。山陽以て知音と爲す」[15]と述べられていることからも

学博士論文、二〇一五年）の第六章「文人の自由世界―頼山陽の煎茶席―」がある。

10　森田『頼山陽及其時代』一〇一頁。

11　その他にも、市島春城『随筆頼山陽』（早稲田大學出版部、一九二五年）第四章、徳富蘇峰『頼山陽』（民友社、一九二六年）第二一章なども参照のこと。

12　中村『頼山陽とその時代』（中）一七八頁。

13　「不読萬巻書。不行萬里路。欲作画祖」其可得耶」（竹田「山中人饒舌」七頁）。

14　『山陽書翰 続編』第一編十五。

15　「山陽作詩。虚心能容譏駁。蓋才學浩博。無所碍故也。余嘗賞其秋柳絶句。山陽以爲知音」（竹田「卜夜快語」三二三頁）。「譏駁」は駮（駁）譏に同じで、『漢書』敘傳上に「永指して以て駮譏す。趙・李亦た閒する無しと云ふ」とある。「浩

明らかであろう。この二人の精神的な繋がりについては、他にも「亦復一樂帖の後に書す」（天保二〔一八三一〕年）などを読めば充分に知ることができる。

彼ら山陽と竹田の絆を一層深きものとしたのは、やはり山陽の九州周遊だったのではないだろうか。この旅での山陽と竹田の交遊を詳しく記録したのが、先にも触れた竹田の「卜夜快語」である。文政元年に、父である頼春水[16]の三回忌を終えた山陽は、実家のある広島を発ち、九州遊歴の途に上った。山口から博多へ渡った山陽は、まず長崎へ向かい、そして、鹿児島から熊本を抜けて、豊後竹田へと入り、竹田との四年ぶりの再会を果たした[17]。その道中、熊本にて、熊本藩医の村井焦雪[18]という者に出会っており、竹田とともに喫するための茶を彼から託された。そのことについて、竹田は以下のように記している。

> 村古香手づから茶を造り、山陽に托して寄贈して曰く、同（とも）に喫せよと。廼（すなは）ち瓶を洗ひ之を試む。色香味並びに佳。海西諸州の出だす所と大いに同じからず。蓋し宇治抹茶の製を用ふならん。[19]
>
> （竹田「卜夜快語」三二三頁。）

「瓶」とは、煮沸する器のことだが、ここでは茶瓶、すなわち茶を煎じるための湯瓶のことを指しているのだろう。「海西諸州」とは九州地方のこと。「宇治抹茶の製」とあるのは、抹茶にするための葉を煎じて喫だのだと思わ

博」とは大きく広いことの意で、『元史』列傳第七七儒學二に「文辞汪洋にして浩博、其の氣煜如なり」とある。「知音」とは、『列子』湯問第五の「伯牙善く琴を鼓き、鍾子期善く聴く。（…）伯牙の念う所、鍾子期必ず之を得たり」（列子『列子』四五頁）に由来する語で、心の通じ合う友のことをいう語である。

16 延享三（一七四六）年～文化十三（一八一六）年。名は惟完、字は千秋又は伯栗、別号に霞崖、拙栄、和亭などがある。

17 その間に詠まれた「卽事 東道松永子登に似す」（『山陽詩鈔』巻三）や「龜井氏を訪ふ 席上の作」（「山陽詩集」巻十一）、あるいは「碕人狭斜を似て命と爲す。余の詩時に綺語を爲(つく)るを見、認め以て眞と爲し、往往勾誘す。余輒ち此の詩を示し解と爲す」（『山陽詩鈔』巻三）などの詩をみるに、山陽が訪ねる先々で煎茶を喫していたことがうかがえる。

18 明和六（一七六九）年～天保十二（一八四二）年。名は煥。字は子陽、通称は冠吾、号は蕉雪や古香。

19 「村古香手造茶。托山陽寄贈。而曰。同喫焉。廼洗瓶試之。色香味並佳。與海西諸州所出大不同。蓋用宇治抹茶之製」。

れる。例えば、山陽が「續茶經の後に題す」(『山陽先生題跋』)のなかで「抑そも末と葉とは、其の種料本別なり。而るに今世葉の貴きは、抹料の旗槍に在り」[20]、すなはち、本来は抹茶と葉茶とでは、その種が異なるのに、この頃は、抹茶の材料である「旗槍」が珍重されている、と述べている。

豊後竹田に着いた山陽は、竹田から呼び止められたこともあり、一日の滞在予定であったところを変更し、結局、七日間そこに留まった。その期間のうちに作られた山陽の詩作品に、煎茶が登場するものはないので、山陽の側から喫茶の様子を知ることはできないのだが、以下に引用する竹田の回想のなかに「茗を煎り」とみえるので、両者が煎茶を介して交遊していたことは明らかである[21]。

> 此の游や、前後周旋(しゅうせん)し、日として首を聚(あつめ)ざる無き者は、山陽、九華及び予の三人なり。其の事を司る者は、古三山。左右に給侍し、茗を煎り香を炷き、研を磨き杯を洗ひ、吾輩をして能く歡娯(かんご)せしめし者は、沙堂なり。[22]
>
> (竹田「卜夜快語」三二八頁。)

「九華」とは、豊後岡藩の藩儒・角田九華(つのだきゅうか)[23]のことで、「古三山」とは古田三山のことである。「茗」は茶のことで、『茶経』巻上一之源に「其の名一に茶と曰ふ。二に槚と曰ふ。三に蔎と曰ふ。四に茗と曰ふ。五に荈と曰ふ」とある。「沙堂」という人物については詳らかでない。

この九州遊歴の後、山陽が竹田と再開を果たしたのは文政六(一八二八)年になってからのことであった。今度は、竹田が上京し、翌七年の正月まで京阪に留まった。この年は、山陽、竹田、雲華のみなが京都におり、集まってはさまざまの勝景の地へと赴いている。その交遊のなかから生まれたのが竹田の「随縁沙彌語錄」(文政六年)である。禅家に擬した竹田は、同文の第

---

[20] 「抑末與葉其種料本別而今世葉貴者在末料之旗槍」。「末」は抹茶のこと。「旗槍」とは、極上等の茶のこと。

[21] 茶に関しては他にも、「金作、菓を造ること極めて精な、力を用ゐることなきのみと一晝夜にして、十二塊を得て山陽に餉れり。書を寄せていふ、當時、酒肉饜飫にして(…)」などの話も登場する。

[22] 「此游也。前後周旋。無日不聚首者。山陽九華及予三人。司其事者。古三山。左右給侍。煎茗炷香。磨研洗杯。使吾輩能歡娯者。沙堂」。

[23] 名は簡、字は大可または廉夫、通称は才次郎、九華は号。天明四(一七八四)年〜安政二(一八五六)年。

四則で、以下のように述べている。

> 沙彌酒を喜ぶ。然れども意は醉に期し、中山の釀に在らざるなり。又、茶を喜ぶ。然れども意は醒に期し、陽羨の茗に在らざるなり。又、肉を喜ぶ。然れども意は養に期し、河の鯉に在らざるなり。
> 嬾曰く、吾は則ち然ず。飲まざれば則ち已む。飲めば必ず伊丹の諸白。啜らざれば則ち已む。啜れば必ず菟道の頭番。食わざれば則ち已む。食えば必ず生洲の金鱗。
> 癡曰く、個は是れ沙彌随錄の的を得たる事、恐くは別に随錄の的を得ざる事あり。[24]
>
> （竹田「随縁沙彌語錄」三七三〜四頁。）

「沙彌」は、剃髪しており僧のような姿をしているが、妻帯して世俗に生きる者のことだが、ここでは竹田当人のことである。また、おこたりを意味する「嬾」は山陽を、おろかを意味する「癡」は雲華を、それぞれ指している。「中山の釀」は中山酒に同じで、仙酒のこと。一度飲めば、千日は醉いからさめないという。『搜神記』十九に「狄希は中山の人なり。能く千日の酒を造る。之を飲めば千日醉ふ」とある。「陽羨の茗」は茶の名品の名で、盧仝の「茶歌」に「天子須らく陽羨の茶を嘗むべし」とある。「諸白」は上等の酒のことで、『庖厨備用倭名本草』巻十二に「日本ノ名酒ニハ南都ノ諸白 此酒ムカシヨリ其の名天下ニアラハレ今ニ至テコレニ及フハナシ」とみえる。「菟道」は京都の宇治のことである。「生洲」は、京都の鴨川や高瀬川近辺にあった、あるいは各地の魚料理を主とする料理屋のことか。「金鱗」とは、美しい魚のこと。『海山記』に「洛水の漁者生鯉を獲たり。金鱗赬尾、鮮明にして愛す可し」とある。

以上の引用箇所で話題にされているのは茶と酒と肴だが、このうちの茶と酒については、周知の通り、それまでにもしばしば対照的に語られてきた[25]。

---

[24] 「沙彌喜酒。然意期于醉、不在中山釀。又喜茶。然意期于醒、不在陽羨茗也。又喜肉。然意期于養、不在河之鯉。」嬾曰、吾則不然。不飲則已。飲必伊丹諸白。不啜則已。啜必菟道頭番。不食則已。食必生洲金鱗。」癡曰、個是沙彌随錄的得事、恐別有随錄不得的事。」

[25] 茶と酒の組み合わせは古く、すでに『三国志・呉書』に認められる。後の政治家・韋昭が呉の四代皇帝・孫皓の開いた宴席で酒の代わりに茶を賜ったという。唐代には、茶と酒を対のものとして詠んだ詩が多く作られているが（例えば、高橋忠

もちろん、そのことは竹田の念頭にも置かれていたであろう。酒と茶を比べる際には、少なくとも禅家においては、酒よりも茶の方に重きが置かれることが多いように思われる。例えば、高遊外売茶翁の「越谿の新茶を試む」に、「酒は偏(ひとえ)に氣を養ふ功勇の如し／茶は只心を清む徳仁の如し／縦へ勇功をして四海に施さ使むるも／爭(いかで)か如かん仁徳の黎民(れいみん)を保するに」とある。しかし、山陽等においては、それらは対のものとして扱われることはあっても、連続して愉しまれるべきものであった。その様子は「郊遊より歸り 君彝來宿す」（二首）や「君夷と同に嵐山に遊ぶ 一僧寺に宿す」においてにおいて確認することができる。これらは、上の「随縁沙彌語錄」と同じく、文政六年の交遊の際に詠まれたものである。

「郊遊より歸り 君彝來宿す」（二首のうちの一首）
醉歸相要宿吾家　醉ひ歸りて相要す吾家に宿すを
呼取山妻又煮茶　山妻(さんさい)を呼び取りて又た茶を煮る
推枕剔燈同不睡　枕を推し燈を剔(そ)り同に睡らず
一餅寒影對秋花　一餅の寒影秋花に對す
（「山陽詩集」巻十六。）

「山妻」は己の妻をいうときの謙称で、李白の「范金□に贈るの詩」に「祇(た)だ應に自ら索漠たるべし、舌を留めて山妻に示す」とある。「剔燈(てきとう)」は燈をかきたてて明るくする意。「推枕」は枕を押しやり起きること。白居易の「長恨歌」に「衣を攬(と)り枕を推して起ちて徘徊す」とある。「寒影」は、寒そうな影あるいは、そのすがた。

「君夷と同に嵐山に遊ぶ 一僧寺に宿す」[26]

彦「白居易の茶と陸游の茶：茶詩の対偶表現をてがかりとして」『東京学芸大学紀要』（人文社会科学系Ⅰ）（六六）（東京学芸大学学術情報委員会、二〇一五年）八十〜九八頁を参照のこと）、末期には王敷撰『茶酒論』が著されている（茶と酒の論争を水が仲介するという物語）。また、日本にも禅僧・蘭叔玄秀（らんしゅくげんしゅう）の『酒茶論』（天正四〔一五七六〕年）がある（酒好みの忘憂君と茶好みの滌煩子による論争と、その一閑人による仲裁の話）。
また、山陽における酒については、池田明子「頼山陽と酒」『日本醸造協会誌』（一〇八、一）（日本醸造協会、二〇一三年）三二〜三六頁、『頼山陽と酒 一杯一杯復一杯』（頼山陽史跡資料館、二〇一七年）を参照のこと。

[26] この遊と直接関係するものであるかは不詳であるが、浦上春琴画の《嵐峡尋秋図

醉餘禪榻烹旗槍　醉餘禪榻旗槍を烹る
借枕淸眠對短檠　枕を借り淸眠短檠に對す
夜半起來疑有雨　夜半起き來りて雨有るを疑ふ
一林星彩帶溪聲　一林星彩溪聲を帶ぶ

（「山陽詩集」巻十六。）

「禪榻」は坐禪を組むときの腰掛のこと。杜牧の「醉後僧院に題するの詩」に「今日鬢絲禪榻の畔、茶煙輕く颺る落花の風」とある。「旗槍」は、極上等の茶のこと。茶の葉を旗に、その嫩莖を槍に喩えていう。『茶録』の「茶芽は鷹爪・雀舌の如くは上爲り、一旗一槍は之に次ぐ」に拠る。「溪聲」、谿聲とともに、谷川の音のことをいう。杜牧の「開元寺に題するの詩」に「谿聲は僧の夢に入り、月色は紛堵を暉す」とある。

文政六年より後、竹田は文政十二（一八二九）年六月から天保元（一八三〇）年の正月にかけて[27]、そして同天保元年の十二月から翌年にかけて、関西に遊歴したが、入洛した際には山陽のもとを訪れている。天保二年三月のこと、山陽は大阪へと向かう竹田を見送るため、ともに淀川を下った。結果として、これが彼らの最後の直接的な交わりとなった。後に、その際に山陽から預かった煎茶道具（茶壺・涼爐）を出し、その時の様子を懐かしみつつ、竹田は《煎茶具》（天保四年）を製作している。そこには「頼山陽留贈せらる茶具に題す」とう詩が付されているのが、その詩の識語には、「辛卯の春、山陽予を送りて舟を高瀬に買ひ、淀川より大坂府に抵る。此の日、舟中、茶を煎じ酒を酌み、詩を作して唱和し、遂に茶具を留贈して別る。明年壬辰九月、山陽棄世す。今茲癸巳秋、予竹田莊に在り、再び其の具を検し煎點す。経日、物在るも人亡の感に勝ふる能はず。因て小絶を貼し、紀してここに云く」[28]と

巻》には、頼山陽、田能村竹田、浦上春琴、小石元瑞が嵐山に遊んだ際の様子が描かれており、そこには煎茶を娯しんだ痕跡が確認できる。《嵐峡尋秋図巻》については、『文人として生きる——浦上玉堂と春琴・秋琴 父子の芸術』（岡山県立美術館／千葉市美術館、二〇一六年）二四五頁を参照のこと。

27 文政十二年に、竹田は山陽の宅へ赴き応接を受けている。その時の様子は「臘月二四日 山陽賢兄を訪ひ 留宿す 令嗣又二郎畫を索む 爲に見る處を寫し 二絶を附す」からうかがえる。詩は、「我の爲に掃除す畫榻の間／茶を煎じ更に爲に前灣に汲む／他時學就れば試みに重ねて展べよ／頭角嶄然として似の山に此たり（爲我掃除畫榻間／煎茶更爲汲前灣／他時學就試重展／頭角嶄然似此山）」（「竹田遺稿」巻二）。

28 「辛卯春山陽送予買舟高瀬由淀」川抵大坂府此日舟中煎茶酌酒」作詩唱和遂留贈

ある。詩は以下のようなものだ。

「頼山陽留贈せらる茶具に題す」
吟友同舟下淀川　吟友舟を同にし淀川を下る
洗瓶焙茶手親煎　瓶を洗ひ茶を焙り手づから親しく煎れる
邇時情景今難忘　邇の時の情景今に難れ忘し
寄在霏霏一縷烟　寄せて在り霏霏たる一縷の烟
（『大分県先哲叢書 田能村竹田 資料集 絵画編』五七六頁。）

「吟友」とは詩友のことだが、ここでは山陽のことを指している。ただし、舟には竹田の子・如仙[29]も乗っていた。「霏」は煙の起こる様をいう。『晉書』王羲之傳論に「煙霏霧結」とある。

以上、山陽と竹田の交遊のなかから生まれた詩文を取りあげてきた。それらの作品から明らかであるのは、すでに「随縁沙彌語錄」を扱った際にも指摘しておいた通り、一貫して茶と酒とが対のものであるように登場するということである。確かに、山陽の「郊遊より歸り 君彝來宿す」や「君夷と同に嵐山に遊ぶ 一僧寺に宿す」では、「醉歸」や「酔餘」の後に茶を喫する様子が表現されていた。実際的な側面からすれば、酔後の喫茶には、清談を行うための意識の覚醒に期待が寄せられている。しかしそれ以上に、山陽や竹田においては、中国の文人に対する憧憬、そして、その実践が考えられるだろう。言うまでもなく、中国文人の生活の姿勢は、彼らの残した詩文から学ばれた[30]。例えば、すでに白居易の「蕭員外新蜀茶を寄す」には「蜀茶寄せ到って但だ新たに驚き／渭水煎し來って始めて珍を覺ゆ／滿甌乳に似て持して翫するに堪へたり／況んや是れ春深くして酒渇せる人をや」[31]とあり、酔後に茶を喫することの娯しみがあらわされている。あるいは、山陽自身も、皮日休の詩「閑夜酒醒む」[32]に範を取り、「春琴畫山水に題す 二首」のなかで

茶具而別明年」壬辰九月山陽棄世今玆癸巳秋」予在竹田荘再検其具煎點経日」不能勝物在人亡之感能因貼小絶」紀焉云」。

29 名は太一、字は孝耟、諱は躬耕、別号に小花梅。文化五（一八〇八）年〜明治二九（一八九六）年。画家で医者。医学は後に出てくる小石樫園に学んだ。

30 中国の文人文化が日本の煎茶文化に与えた影響に関しては、楢林（小川後楽）の「日本の煎茶道と中国歴代の茶」を参照のこと。

31 石川『茶をうたう詩』六二頁。

32 皮日休の詩は以下の通り。「醒め來れば山月高し／孤枕群書の裏／酒渇して漫に茶を思ふ／山堂呼べども起たず」（石川『茶をうたう詩』一七二頁）。

「酒渇し茶を思ふも未だ熟せず」と詠んでいるのである。

二　雲華上人との交遊

市島春城も指摘している通り、「頼山陽、田能村竹田と云ふと、何人も聯想するのは僧雲華」[33]である。ここでいわれている雲華とは、竹田と郷里を同じくする浄土真宗の学僧のことであり[34]、文化元（一八〇四）年の出会い以降[35]、生涯にわたって山陽と深交を結んだ人物である。その雲華は、京都本願寺の講師を勤めていたこともあり、故郷である豊後と京都の間を幾度となく行き来したが、京都に訪れた際には、山陽、あるいはその界隈の文人たちと一緒に花見などの風雅な遊びを楽しんだ。

山陽が雲華との絆を一層深きものにしたのは、竹田と同じく、九州を遊歴した際であった。例えば、竹田の「卜夜快語」の冒頭には、「今茲八月僧雲華至り、予に語りて曰く、吾れ頼山陽に下關廣梅月の宅にて晤へり。山陽道ふ海を渡りて西し、將に足下を竹田艸堂に叩かんとす」[36]とある。ここでいわれている「廣梅月」とは、下関の豪商・廣江殿峯[37]のことだが、九州に渡るためにまず下関に向かった山陽は、彼のところに三月十四日から四月二三日まで滞留している。そこで、東へ向かおうとする雲華にちょうど出会ったのである。その際に山陽は、以下のような詩を詠んでいる。

---

33 市島『藝苑一夕話』（上）二二一頁。

34 本論では特に論じることはないが、竹田と雲華の関係については、湯谷祐三「雲華上人との交流と田能村竹田の画業」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』（四九）（名古屋外国語大学、二〇一五年）一八四〜二〇六頁を参照のこと。

35 あるいは、初対面は文化五年のことか。山陽と雲華の交遊については、影山「雲華上人年譜」九頁を参照のこと。また、雲華については、湯谷祐三「雲華上人との交流と田能村竹田の画業」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』（四九）（名古屋外国語大学、二〇一五年）一八四〜二〇六頁、「広瀬淡窓より見たる雲華上人の人間関係――「雲華院釈大含信慶講師年譜稿」補遺」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』（五〇）（名古屋外国語大学、二〇一六年）二七六〜三〇〇頁。

36 「今茲八月僧雲華至。語レ予曰。吾晤二頼山陽于下關廣梅月宅一。山陽道渡海而西。將レ叩二足下于竹田艸堂一」（竹田「卜夜快語」三二一頁）。

37 名は爲盛、字は文龍、殿峯、梅月は号、通称は吉右衛門という。宝暦六（一七五六）〜文政五（一八二二）年。山口は西細江町の商人で、風流好事であった。山陽と殿峯の関係については、谷口匡「頼山陽と下関の商人広江殿峰」『産業文化研究所所報』（十二）（下関市立大学付属産業文化研究所、二〇〇二年）十九〜三一頁に詳しい。

「大含師に遇う 師將に東遊し岳に上らんとす 此を賦し贈と爲す」
吾泛火海君富山　吾は火海に泛び君は富山
相逢握手赤馬關　相逢い手を握る赤馬關
雖無酒腸海不測　酒腸の海の測られざる無しと雖も
自有詩格山難攀　自ら詩格の山の攀ぢ難き有り
共把醒眼評山海　共に醒眼を把つて山海を評し
采眞歸來重盡歡　采眞歸來せば重ねて歡（かん）を盡くさん」
取吾火海火　吾が火海の火を取り
融君富山雪　君が富山の雪を融かし
煎君雲華喫七碗　君が雲華を煎て七碗を喫せば
四腋生風凌列缺　四腋風を生じて列缺を凌がん
與君下視大八洲　君と下視せん大八洲
海如蹄涔山如垤　海は蹄涔の如く山は垤の如し

（『山陽詩鈔』巻三）

「大含」は雲華上人のこと、「火海」は八代海（あるいは不知火海）のことである。「富山」は富士山のこと。雲華は、この後に、日光、江戸、鎌倉を廻り、六月には富士山に登っている。「赤馬關」は赤間関のことで、山口の下関の古称。「酒腸海」は酒量の大なるをいい、劉叉の五言律詩「自問」（『全唐詩』）の「酒腸寛きこと海に似たり／詩膽は天よりも大なり」に依る。「采眞」は眞實の理を把ることで、『荘子』天運第十四に「古の至人は、道を仁に仮り、宿を義に託して、以て逍遥の虚（墟）に遊び（…）古者是を采眞の遊びと謂う」とある。「雲華」はここでは茶の名を指している。唐代の文人・皮日休の「寒日書齋卽事の詩」に「深夜數甌唯だ柏葉／清晨一器是れ雲華」とある。雲華上人の名は、自身の育てる茶の名「雲華」に由来するものである。そのことについては、田能村竹田の『竹田荘師友畫録』に「平生茶を好んで酒を好まず。初め古城に居り、毎歳茶を製し、其の採摘焙造の時に當つては、精心力、一連數日、眠食倶に廢す。嘗て之れを縉紳某公に贈る。公之れを喫し、其の風を引き光を浮ぶる態を愛し、之れを雲華と名づく。雲華悦び卽ち取つて号と爲す」[38]とある。「七碗」と「四腋生風」は、盧仝の高名な詩「茶歌（筆を

38 「平生好茶」而不好酒初居古城毎歳製茶當其採摘」焙造之時精心 力一連□日食倶廢」嘗贈之縉紳某公々喫之愛其引風浮光之」態名之雲華雲華悦卽取爲号」（竹田

走らせて孟諫議の新茶を謝す)」(『古文眞寶』)の「七椀にして喫するを得ず／唯覺ゆ兩腋習習として清風生ずるを」に基づくが、ここでは山陽と雲華とのふたり分で四つの腋とされている。「列缺」は列缺に同じで、稲妻による天の裂け目のことをいう。『楚辭』遠遊に「上れば列缺に至り、降れば大壑を望む」とある。「大八洲」は日本のこと。「蹄涔」は牛馬の足跡に溜まった水のことで、転じて物が小さいことをいう。『淮南子』第二俶眞訓に「夫れ牛蹄の涔には、尺の鯉無し」とある。「垤」は蟻塚のことだが、転じて小さな岡のことをいう。『詩經』國風東山に「鸛垤に鳴く」とある。また、谷口によれば、この末句は郭璞の「遊仙詩」(『芸文類聚』巻七八)の「東海は猶ほ蹄涔の如く、崑崙は蟻堆の若し」に似た表現である[39]。

上に引用した詩は、『山陽詩鈔』[40](天保四〔一八三三〕年刊)に載せられているものだが、もともとは「西遊詩巻」[41]に収められていた。「西遊詩巻」の詩には、以下のような文言が付されている(これは『山陽詩鈔』では消されたものである)。それは、「禪師は飲を解せず、其の山、茶を產し、名を雲華と曰ふ。此の回、亦た余と茗飲し劇談す。故に云う」[42]というもので、ここから、この詩が山陽と雲華が実際に煎茶を喫したことに即して作られたものであることは想像に難くないだろう。その際に山陽が抱いていたであろう喫茶に対する思いが、詩の後半にある「君が雲華を煎て七碗を喫せば／四腋風を生じて列缺を凌がん／君と下視せん大八洲／海は蹄涔の如く山は垤の如し」という箇所であらわされている。ここれいわれているのは、煎茶を喫することで、日本を眼下に望むことができるほど高くにある雲の裂け目まで上昇していったかのような気分になった、というのである。このような天、あるいは仙境への飛翔というモチーフは、盧仝の「茶歌」に確認することができ、そこには「蓬莱山／何處にか在る／玉川子／此の清風に乘じて歸り去ら

『竹田荘師友畫録』四五八〜四五九頁)。

39 谷口「頼山陽「西遊詩巻」訳注(一)」一四七頁。

40 『山陽詩鈔』は、山陽が直接その編集に携わったものとされている。

41 「西遊詩巻」という名称については、谷口「頼山陽「西遊詩巻」訳注(一)」一六三〜一六四頁を参照。

42 「禪師不解飲其山產茶名日雲華此回亦與余茗飲劇談故云」(『山陽先生真蹟西遊詩』)。「劇談」とは、急いで話す、はげしく物言うことで、『漢書』揚雄傳上に「人と爲り簡易佚蕩、口吃して劇談する能はず(爲人簡易佚蕩、口吃不能劇談)」とある。また、以上に引用した詩も「西遊詩巻」のものと『山陽詩鈔』のものとでは異なるが、内容にそれ程の差はない。「西遊詩巻」に収められている詩については、谷口「頼山陽「西遊詩巻」訳注(一)」一六九頁に詳しい。

んと欲す」[43]とある。また、このモチーフは後世にも引き継がれ、山陽に多大な影響を及ぼした蘇軾の「周安孺に茶を寄す」[44]にも、あるいは、金代の文人・馮璧の「東坡南海に茶を烹る圖」[45]にも確認することができる。

この九州遊歴の後、文政四（一八二一）年に雲華が京都本願寺の講師に着任したこともあり[46]、山陽と雲華は頻繁に雅遊を行なっている。それは、彼らを含めた数人の文人仲間によるものであった。そこでも煎茶が喫されていたことは、彼らの残したいくつかの詩をみれば明らかなことである。例えば、文政五年に、ふたりは小石檉園[47]、小田百合[48]等とともに伏見に舟游に出かけている[49]。その際に雲華が詠んだ「菟道に舟を泛べ橋東にて楓を觀る」という詩には「菟道橋東勝遊に足る／茶を烹酒を燖(あたた)め數(しばしば)舟を停める」[50]とある。また、翌年には、檉園や浦上春琴[51]と嵐山へ花見に出かけており[52]、雲華の「嵐

---

[43]「蓬莱山」とは、東海の東にあり、仙人が住む仙山のこと。「玉川子」は盧仝の号である。

[44] 詩には「清風兩腋を擊ち／去て鴻鵠を凌がんと欲す」とある。「鴻鵠」とはおおとりのことで、『列子』楊朱に「臣之を聞く、呑舟の魚は、枝流に游ばず、鴻鵠高く飛びて、汚地に集らざると」とある。

[45] 詩の結句は「天游す兩腋玉川の風」というものである。

[46] 文政四年には、山陽は雲華を伴って、避暑のために糺ノ森に出かけている。その様子は雲華の「六月廿日糺森(きゅうりん)に避暑し鴉(あ)字(じ)を得る」という詩にあらわされている。雲華の詩を集めた『雲華草』には、そのすぐ後に「重ねて糺森に遊ぶ」（三首）という詩も載せられている。ここに山陽も同伴していたのかは不明であるが、煎茶に関するものなので、以下に引用しておく。「水石潺湲耳快きかな／涼棚手ずから汲み好みて茶を烹る／更に欣ぶ此日其れ何日／林中一客來たるを見ず」（雲華『雲華草』巻十）。ちなみに、この詩の舞台である京都の賀茂御祖神社の境内に位置する糺の森は、良質の湧水を汲むことのできる、文人が好きこのんで出かけ、煎茶を娯しんだ場所でもある。「潺湲」とは、水の流れるさまのことで、『楚辭』九歌に「荒忽として遠く望み、流水の潺湲たるを觀る」とある。「涼棚」とはすずみ台のことで、暑さを避けてすずむために腰をおろす台のことである。

[47] 名は龍または橘龍、字は元瑞、檉園は号のひとつ。天明四（一七八四）年〜嘉永二（一八四九）年。京都の医者で、公私にわたり山陽と親しくした。

[48] 名は贏または瀛、字は巨海、百合の別号に海僊、百谷などがある。天明五（一七八五）年〜文久二（一八六二）年。周防国出身の南画家。

[49]「舟を伏見に泛べ遂に菟道に至り楓を觀る」（『山陽詩鈔』巻六）を参照のこと。

[50]「菟道橋東足勝遊／茶烹酒燖數停舟」（『雲華草』巻十一）。「菟道」とは京都の宇治のこと。

[51] 名は選、字は伯挙・十千、春琴は号。安永八（一七七九）年〜弘化三（一八四六）年。岡山出身の文人画家。浦上玉堂を父にもつ。

[52]「嵐山二首」（『山陽詩鈔』巻七）を参照のこと。

峡觀花」には「又た竹榻を移し茶鼎を命(よ)ぶ／花に對ひ聯座し活火にて烹る」[53]とある。あるいは、文政七年にも、樫園や春琴に加え、山陽の母・梅颸[54]、妻・梨影[55]、山本梅逸[56]、江馬細香[57]等と沙河に遊び、帰宅後に煎茶を喫したことが山陽の「甲申十月朔 同諸兄 遊沙河 卽事」に「同に醉ふ寒邨賣酒の家／歸りて茆屋を過ぎ又た茶を煎る」[58]とあることからうかがえる。

文人同士の集まりに煎茶が供されていたことは上で確認した通りであるが、それはまた日常の応接のなかで娯しまれるものでもあった。そのことについては、例えば、以下に引用する「丁亥臘月廿四日 雲華師の寓に宿す」（文政十〔一八二七〕年）や「雲華師來れども吾が書課未だ了らず 之を別室に延く」（文政十二〔一八二九〕年）などの詩から確認することができるだろう。

「丁亥臘月廿四日(ていがいらうげつ) 雲華師の寓に宿す」
茶鼎鳴休夜雨鳴　茶鼎鳴り夜雨鳴休(や)む
一燈聯枕故人情　一燈に枕を聯ねる故人の情
慣聞簷滴平生響　聞き慣れる簷滴平生の響
□向君家有別聲　□しみて君家へ向ふ別聲有るを
（「山陽詩集」巻十九。）

「臘月」は十二月のこと。「茶鼎」とは茶を煎じるために用いる道具のこと。ここでは湯が沸いた音がその茶鼎から聞こえてくる様子をあらわしている。「故人」は旧友のことで、『禮記』檀弓下に「孔子の故人を原壤と曰ふ」とある。「簷滴」は檐滴に同じで、のきばから垂れる水滴、雨だれの意。潘岳の「悼亡詩」に「春風隙に緣りて來たり、晨霤は簷を承ぐ滴なり」とある。上の詩は雲華が客を迎える側にあるが、以下の詩では山陽が客を迎える立場にある。

「雲華師來れども吾が書課未だ了らず 之を別室に延く」

---

53 「又移竹榻命茶鼎／對花聯座活火烹」（『雲華草』巻十一）。「竹榻」は竹で作った腰掛けのこと。
54 賴春水の妻。名を静子という。宝暦十（一七六〇）年～天保十四（一八四四）年。
55 山陽の妻。寛政九（一七九七）年～安政二（一八五五）年。
56 名を亮、諱は親亮、字を明卿、梅逸は号。天明三（一七八三）年～安政三（一八五六）年。尾張出身の文人画家。
57 名は裏、多保、細香は字、湘夢や箕山ち号す。天明七（一七八七）年～文久元（一八六一）年。山陽の門人のひとり。
58 「同醉寒邨賣酒家／歸過茆屋又煎茶」（「山陽詩集」巻十七）。

爐火通紅湯沸鐺　爐火紅を通じ湯は鐺に沸く
瓶中梅蕚數枝明　瓶中の梅蕚數枝明かなり
付君清福能消受　君に付す清福能く消受せよ
更向窓間著雪聲　更(さら)に窓間に向ひ雪聲を著(つ)く

（『山陽遺稿 詩』巻四。）

「鐺」は湯沸のこと。「清福」とは、清らかな幸福のことで、『人譜類記』下に「毎夕香を焚き、天に清福を賜ふを得たるを謝す」とある。また、「清福」については、舩阪が「田能村竹田の詩文にみる煎茶」のなかで示唆している通り、竹田が煎茶に関連して用いており、「原梅坡の書及び詩を得て却寄す」などのいくつかの詩に認められる。「消受」は享受すること。「雪聲」は雪の降る音である。詩からは、煎茶を淹れ、梅の花を活け、訪れた雲華に清らかな幸福が訪れるようにと応接する山陽の様子がうかがえる。

小結

これまで、文化文政期を中心とした文人の多くが煎茶を嗜んでいたとはいわれながらも、その行為の内実が実際のところいかなるものであったのかが示されることは多くなかったように思われる。このような問題意識から出発して、本稿では、当代を代表する文人・山陽の漢詩を中心に扱い、竹田や雲華との交遊において煎茶がいかなる意義を有していたのかを詳らかにすることを試みてきた。

まず、竹田との交遊では、しばしば「酒」と「茶」が対となって登場することが明らかとなった。そこから、彼らの遊びの規範に中国文人からの影響を読み取り、その実践を彼らが実際に行なっていることを指摘した。そのような態度はまた、雲華との交遊のなかから生まれた「大含師に遇う 師將に東遊し岳に上らんとす 此を賦し贈と爲す」においても確認することができた。このことに関しては、楢林が日本の煎茶文化について述べているように、「「煎茶」は、中国の茶の展開に即し、日本的なものの強調よりは、むしろ中国的、異国趣味的なものへの憧れ、模倣に力点が置かれ」[59]てきたことの、江戸時代の文人煎茶家の「精神的背景は、遠く明代を溯る中国唐代の詩人玉川子盧

[59] 楢林「日本の煎茶道と中国歴代の茶」八二頁。

仝の「茶歌」に代表される喫茶精神に求められた」[60]ことの証左となったのではないだろうか。

また、煎茶の喫茶趣味は、旅のなかで、あるいは郊外への遊びの一貫として娯しまれるものであったというだけなく、深く山陽の日常の生活に根付していたものであったということも、第二節の後半で扱った山陽、雲華の詩（あるいは注 27 の竹田の詩）において確認することができた。詩では、煎茶を振る舞い応接する様子が表現されていたのだ。山陽は、文政六年の「桐陰茶寮記」において自身の煎茶観を述べているが、「雲華師來れども吾が書課未だ了らず 之を別室に延く」の内容は、そこで述べられていることの実践的な姿であったといえるものとなっていたのではないだろうか。「桐陰茶寮記」で山陽は、「物外に心を游す」という語を用い、忙しい日常のなかに閑を見つけ喫茶をする喜びについて論じていたのだから[61]。

---

[60] 楢林「日本の煎茶道と中国歴代の茶」一二二頁。

[61] 「桐陰茶寮記」については、拙論「心を物外に游す――「桐陰茶寮記」にみる頼山陽の煎茶観」『茶の湯文化学』（二七）（茶の湯文化学、二〇一七年）三三～四七頁を参照のこと。

〔凡例〕

本稿における山陽の作品の引用は、基本的に、『山陽詩鈔』（天保四年）と『山陽遺稿 詩』（天保十二年）については富士川英郎他編『詩集日本漢詩』（第十巻）（汲古書院、一九八六年）から、そこに収められていない詩に関しては「山陽詩集」木崎愛吉／頼成一共編『頼山陽全書 詩集』（頼山陽先生遺跡顕彰会、一九三一～一九三二年）から、漢文については「山陽文集」木崎愛吉／頼成一共編『頼山陽全書 文集』（頼山陽先生遺跡顕彰会、一九三一～一九三二年）から行った。また、書簡については徳富猪一郎／木崎愛吉／光元基次郎編『頼山陽書翰集』（上・下・続）（民友社、一九二七年）から行った。ただし、『山陽詩鈔』と『山陽遺稿 詩』に関しては、奥山正幹『山陽詩鈔註解』（山陽詩鈔出版会、一九一四年）を、そして、伊藤靄谿『山陽詩鈔新釋』（一八四二）（書藝界、一九八五年）および『山陽遺稿詩註解』（一八三八）（書藝界、一九八五年）を併せて参照した.

〔主要参考文献〕

・石川忠久『茶をうたう詩――『詠茶詩録』詳解』（研文出版、二〇一一年）。
・市島春城『藝苑一夕話』（上）（早稲田大學出版部、一九二二年）。
・雲華上人、赤松翠陰編『雲華上人遺稿 全』（後凋閣、一九九三年）。
・影山純夫「雲華上人年譜」『日本文化論年報』（十五）（神戸大学、二〇一二年）七～十四頁。
・田能村竹田「随縁沙彌語錄」（一八二三年）、「竹田荘茶説」（一八二九年）、「山中人饒舌」（一八三五年）大分県教育庁管理部文化課編集『田能村竹田資料集』（著述編）（大分県教育委員会、一九九二年）三七一～三七七頁、三九五～四〇一頁、一～三九頁。
・中村真一郎『頼山陽とその時代』（一九七一年）（上・中・下）（中央公論社、一九七一～一九七二年）。
・楢林忠男『碧山への夢 煎茶に魅せられた人々』（講談社、一九八五年）。
・楢林忠男（小川後楽）「日本の煎茶道と中国歴代の茶」千宗室監修、高橋忠彦編『東洋の茶』（茶道学体系 七）（淡交社、二〇〇〇年）八一～一二二頁。
・舩阪富美子「田能村竹田の詩文にみる煎茶」『和漢比較文学』（三一）（和漢比較文学会、二〇〇三年）五七～七一頁。
・森田思軒『頼山陽及其時代』（十二文豪 第十一巻）（民友社、一八九八年）。
・守屋雅史「文人のあこがれ、清風のこころ　煎茶・美とそのかたち」大阪

市立美術館編『特別展　文人のあこがれ、清風のこころ　煎茶・美とそのかたち』（大阪市立美術館、一九九七年）六〜十六頁。
・頼多万「頼山陽と田能村竹田」『中國學論集』（四二）（中國文學研究会、二〇〇六年）一〜五〇頁。